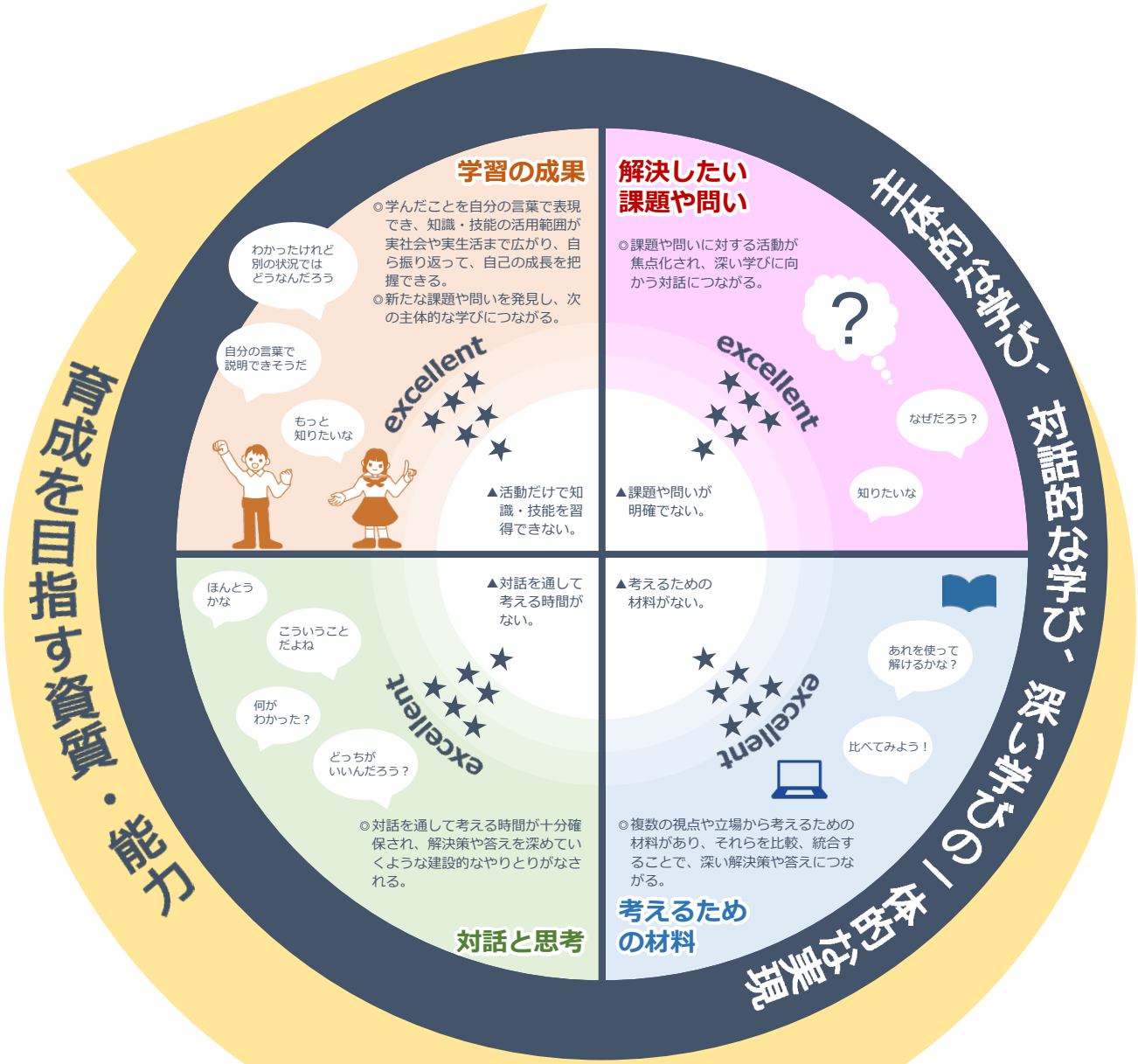
「主体的・対話的で深い学び」の実現

「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善

平成29年度版

＜小学校、中学校、高等学校、特別支援学校共通＞

新しい時代を切り拓く資質・能力を引き出し、高める



子供たちが「どのように学ぶか」に焦点を当て、

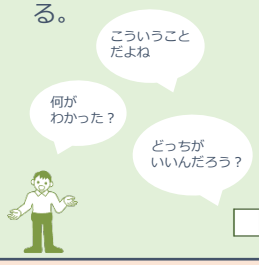
●解決したい課題や問い　●考えるための材料　●対話と思考　●学習の成果

を意識して授業を設計しましょう！

上の図は、「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善を図式化したものです。図の中の子供たちのつぶやきは、学びの過程で湧き上がってくる手応え（学びの実感）を表現しています。子供たち一人一人の可能性を伸ばし、新しい時代に求められる資質・能力を確実に育成していくためには、主体的な学び、対話的な学び、深い学びの過程を一体として実現することが必要です。そうした学びの過程を実現する一つの方法として、「解決したい課題や問い」、「考えるための材料」、「対話と思考」、「学習の成果」を意識しながら、授業設計することを提案します。目指す授業設計はexcellentです。詳細はリーフレットの中をご覧ください。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業設計診断

次の表は、「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、「アクティブ・ラーニング」の視点から授業設計を診断するものです。各項目とも「★」から「excellent」に向かって確認してください。子供たちが習得した概念や思考力等を、手段として活用・発揮させながら学習に取り組み、その中で資質・能力の活用と育成が繰り返されるような指導の創意工夫を促していくことが大切です。各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（見方・考え方）を働かせることが、学びの「深まり」の鍵になります。また、子供一人一人の興味や関心、発達や学習の課題等を踏まえ、それぞれの個性に応じた学びを引き出し、一人一人の資質・能力を高めていくことが重要です。授業や単元の流れに子供の「主体的・対話的で深い学び」の過程が実現する授業設計を意識しましょう。

項目	★	★★	★★★	excellent
解決したい課題や問い ☑	▲課題や問いが明確ではない。 □	△課題や問いはあるが、解決に対話を必要としない。 □	○課題や問いがあり、解決に対話が必要である。 △課題や問いに対する活動の幅が広すぎて、活動が焦点化されにくい。 □	◎課題や問いに対する活動が焦点化され、深い学びに向かう対話につながる。 □
考えるための材料 ☑	▲考えるための**材料**がない。 **材料**とは、資料、道具、教材など教師が事前に準備しておくもの。 □	△考えるための材料はあるが、課題や問いに対する解決策が明示されてしまっている。 △材料や解決策を、事前に教師が説明してしまう。 □	○複数の視点や立場から考えるための材料がある。 △限定的な考えに誘導するものである。 □	◎複数の視点や立場から考えるための材料があり、それらを比較、統合することで、深い解決策や答えにつながる。 □
対話と思考 ☑	▲**対話**を通して考える時間がない。 **対話**とは、課題や問いに沿って考えが広がったり深まったりする言葉のやりとりのこと。 □	△対話を通して考える時間が確保されているが、各自がまとめた内容を紹介するだけである。 □	○対話を通して考える時間が確保されている。 △教師の過度な助言により、対話や思考が抑制されてしまう。 □	◎対話を通して考える時間が十分確保され、解決策や答えを深めていくような建設的なやりとりがなされる。  □
学習の成果 ☑	▲活動だけで知識・技能を習得できない。 □	△知識・技能の活用範囲が狭い形の習得にとどまっている。 □	○学んだことを自分の言葉で表現でき、知識・技能の活用範囲が広がり、振り返りを通して、自己の成長を把握できる。 △課題や問いを解決することで満足し、そこに新たな課題や問いが生まれない。 □	◎学んだことを自分の言葉で表現でき、知識・技能の活用範囲が実社会や実生活まで広がり、自ら振り返って、自己の成長を把握できる。 ◎新たな課題や問いを発見し、次の主体的な学びにつながる。 □

よりよい学級と社会を創る教室文化の診断

各教科等による「主体的・対話的で深い学び」の積み重ねにより、子供の資質・能力が育成され、多様な他者と協働して課題を解決していく教室文化（子供たちが学級において共有している行動様式や生活様式）が醸成されているか診断してみましょう。「学級の全員が、互いに互いのことを、よりよい学級や社会を創るための、学びを深める大事な仲間と思うようになっている」は、特に成熟した学級と言えます。子供たちが互いの異なる考えを尊重し、これからのよりよい社会を様々な人々と共に創造できるようにしたいものです。

			いない		いる	
			0	1	2	3
教室における安心感	1	間違いを言ってはいけないという雰囲気がなくなり、安心して自分の意見を言えるようになっている。	□	□	□	□
	2	自分の意見を相手にわかってもらいたいと思い、発言するようになっている。	□	□	□	□
	3	相手がどんな意見をもっているのかに関心をもち、その意見を聞こうとするようになっている。	□	□	□	□
よりよい学級を創る学びの態度	4	資料から情報を単に読み取るだけでなく、それを解釈するようになっている。	□	□	□	□
	5	わからないことをそのままにせず、積極的に質問するようになっている。	□	□	□	□
	6	与えられた課題や問いに答えるだけでなく、新たな課題や問いを発見するようになっている。	□	□	□	□
	7	学んだことを日常生活や社会と関連付けて生かそうとするようになっている。	□	□	□	□
学び合い支え合う仲間		学級の全員が、互いに互いのことを、よりよい学級や社会を創るための、学びを深める大事な仲間と思うようになっている。	□	□	□	□

「主体的・対話的で深い学び」とは何か

（平成28年12月21日「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」より）

①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
②子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
③習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

■研究協力者

聖心女子大学　文学部教育学科　教授
静岡大学大学院教育研究科附属学習科学研究教育センター（RECLS）学外協力研究員
益川　弘如　先生

このリーフレットには、児童生徒一人ひとりが、自分なりに各教科を好きになり深く学び続けたくなるような、学習に関する科学的知見が詰め込まれています。是非、各先生の授業づくりや校内研修に活用して下さい。例えば、研修等で学習指導案を作成するときに複数人で授業設計診断を用いてチェックすることで、より深い学びを引き出す学習指導案になるでしょう。そのときに、具体的に児童生徒が「どのような対話をしそうか」をシミュレーションしてみてください。そして授業終了時に、児童生徒たちがどのような「ことば」で語るだろうかを具体的に検討し、それを評価指標にすることが、指導と評価の一体化につながるでしょう。児童生徒にとって一つの授業は部品であり、各教科や行事を横断的・総合的に学んでいきます。そのような視点から、ICTや地域の資源を活用しながら、各教科の内容や学び方が分断されず、一体的に深く学んでゆける環境をいかに構築するかの視点も重要となるでしょう。

東京大学　高大接続研究開発センター　教授
大学発教育支援コンソーシアム推進機構（CoREF）
文部科学省　国立教育政策研究所　フェロー
白水　始　先生

平成29年に新学習指導要領が公表されます。そこでは、学校教育において児童生徒に育む資質・能力の「三つの柱」が「個別の知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」と整理され、これを引き出しながら伸ばしていく「主体的・対話的で深い学び」の重要性が指摘されています。

その公表に合わせて、２年目を迎えたこのリーフレットも改訂されました。先生方の学校現場では、この１年間でどのような「主体的・対話的で深い学び」が積み重ねられたでしょうか。すべての子どもが学んだことの意味が分かって先を見通せるような授業、教科等の本質をつかみながら、その見方・考え方も身に付け、自分のその先の学習を一層深め面白くするような授業はできてきたでしょうか。子どもたちが学べば学ぶほど自分らしさが出てきて、仲間と違う自分のよさを追求できるような環境は用意できたでしょうか。それと同じように先生方の学びも多様に豊かになってきているでしょうか。多様性を感じるためには、共通言語が必要です。このリーフレットを基にした先生方の教育実践が、そうした共通言語の役割を果たすことを期待します。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

「カリキュラム・マネジメント」の実現

学校教育目標を実現するために、教育課程を編成し、それを実施・評価・改善していく営み　平成29年度版

＜小学校、中学校、高等学校、特別支援学校共通＞

教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す

育成を目指す資質・能力の３つの柱

学びに向かう力
人間性等

どのように社会・世界と関わり、
よりよい人生を送るか

何を理解しているか
何ができるか

理解していること・
できることをどう使うか

知識・技能

思考力・判断力・
表現力等

各学校が育成を目指す資質・能力を
学校教育目標として具体化

Plan

「主体的・対話的で深い学び」

の実現に向けた授業改善の視点

学習の成果

解決したい
課題や問い

対話と思考

考えるため
の材料

Do

地域・社会・世界

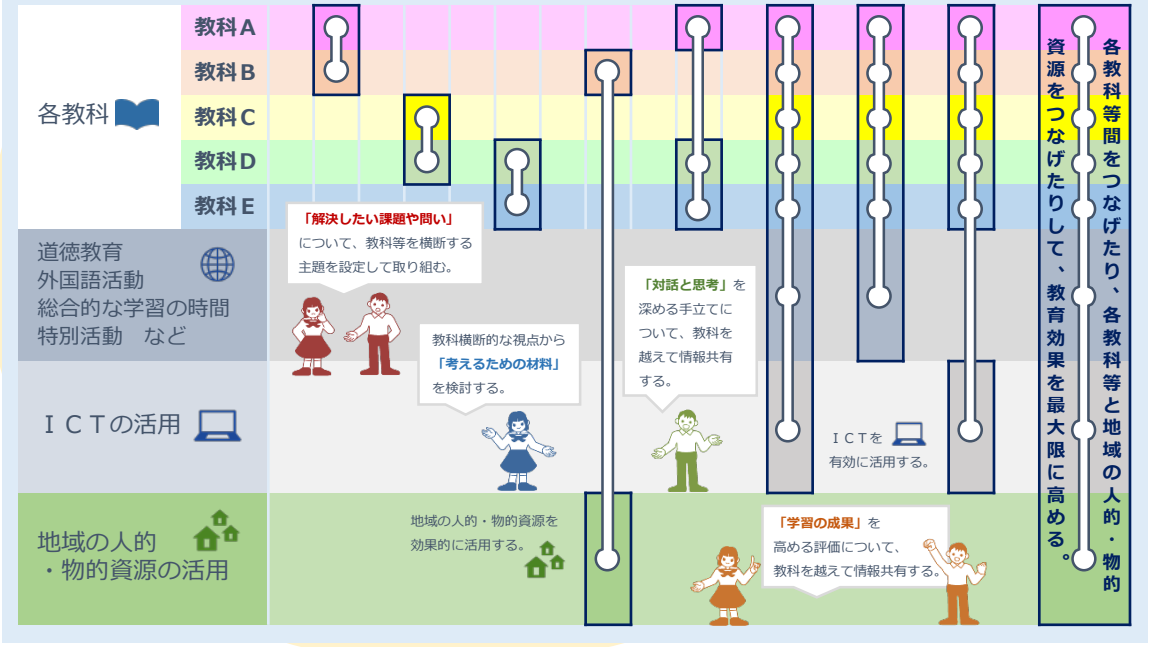
「社会に開かれた教育課程」

□よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会が共有する

□必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にする

□社会との連携及び協働によりその実現を図る

各教科等をつなぐ教育課程の編成と実施例



Action

Check

上の図は、教育課程を軸にした、学校教育の改善・充実の好循環を図式化したものです。「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、子供たち一人一人の資質・能力を確実に育成していくためには、各教科等の学習とともに、教科横断的な視点で学習を成り立たせていくことが重要です。各学校が子供たちの姿や地域の実情等を踏まえつつ、校長を中心に、全ての教員が教科等や学年を越えて学校全体でＰＤＣＡサイクルを確立して教育活動に取り組むことが、子供たちの「主体的・対話的で深い学び」を実現することにつながります。

●当リーフレットは、「中央教育審議会教育課程企画特別部会論点整理（平成27年８月）」を基に作成したものを、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年12月21日）」に基づいて平成29年3月に改訂しました。
●当リーフレットについてのお問い合わせは静岡県総合教育センター生涯学習企画課企画班（0537-24-9706）にお願いします。